

この「研究レターHem21オピニオン」は当機構の幹部、シニアフェロー、政策コーディネーター、上級研究員等が研究活動や最近の社会の課題について語るコラム集です。

(「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記であるHyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。)

発行:(公財) ひょうご震災記念21世紀研究機構 学術交流センター ☎078-262-5713 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2 (人と防災未来センター)



減災、復興、創造・・・ 改めてその意味を問い直す

副理事長兼研究調査本部長 室崎 益輝

阪神・淡路大震災の教訓として、「防災ではなく減災」ということが強調される。阪神・淡路大震災のような巨大災害には、被害をゼロにしようとする「防災」ではなく、少しでも減らそうとする「減災」の考え方で、災害に向き合わなければならない。「大きな自然に対して小さな存在である人間は、災害を力任せに抑え込もうとしてはならない」というあるべき姿勢が、減災という言葉には込められている。傲慢さを捨て謙虚な気持ちで自然に向き合わないといけない。身の丈に合った対策をコツコツ積み重ね、少しずつ被害を減らしていく取り組みこそが、大きな自然と共生を図るうえでは欠かせないのである。

コツコツと積み重ねるといことは、対策の足し算で被害の引き算を図ることに他ならない。この足し算には、人間の足し算、空間の足し算、手段の足し算などがある。人間の足し算では、行政だけではなく企業やNPOを含めた多様なセクターが連携することが求められる。空間の足し算では、都市構造レベルの取り組みとコミュニティレベルの取り組みとが融合することを求められる。手段の足し算では、ハードウェアにソフトウェア、さらにはヒューマンウェアを足し合わせる必要がある。減災は「合わせ技」を求めているのだ。

その足し算で忘れてはならないのが時間の足し算である。被害を軽減するには、応急対応だけでは駄目で、予防対応、復興対応も欠かせないということだ。救助や消火といった直後の応急対応が、被害軽減に欠かせないことは言うまでもないが、事前減災としての予防対応、事後減災としての復興対応も減災には欠かせないのである。これに関わって「減災のサイクル」という言葉が使われる。この言葉は、予防から応急、応急から復興、復興から予防という連続性を大切にして、それぞれのフェーズで被害軽減に努めることを求めている。

ところで、阪神・淡路大震災で学んだのは、減災のサイクルの中で復興が極めて重要な位置にあるということであった。第1に、復興対応は応急対応を継承して、被害の緩和を図る役割を担う。第2に、復興対応は予防対応を先取りして、被害の抑制を図る役割を担う。それだけに、減災という視点から、復興に力を入れなければならないのである。事後ケアでは、被災者の苦しみを軽減するという一方で、生活再建や経済再建への取り組みが求められる。また、事前ケアでは、同じ悲しみを繰り返さないためにも、被災基盤の解消に取り組むことが求められる。

さて、復興には次の災害に向けての安全社会をつくることが求められるが、防災施設や防災組織を整備するだけでは十分でない。「小さな減災」という課題に加えて「大きな減災」という課題があるからだ。大震災は、被害をもたらすとともに社会の矛盾を顕在化させた。高齢化社会の歪みや環境破壊の誤りを、私たちに教えてくれたのだ。となると、その社会的な歪みに向き合い、その改善を図ることも復興では欠かせない。この社会の歪みに立ち向かうことを、私は大きな減災と呼んでいる。自然との環境共生を図ること、自律コミュニティを育むこと、歴史文化を継承することは、安全と密接に関わっているからだ。

この大きな減災を図ることこそが、当時の兵庫県知事であった貝原俊民さんが提唱された「創造的復興」そのものである。時代に合わなくなった20世紀文明の未熟さから決別し、新しい価値観を持った21世紀文明の創造を図るのが、創造的復興の本意であった。そこでは、大量消費型社会、ハード至上主義社会、経済優先社会からの脱皮あるいは昇華が目指されていた。創造は、新しい価値を生み出すことであり、過去の弊害を克服することで、量よりも質を問うものである。それが、現実には曲解され悪用され、単なる量的拡大を求める口実に使われている。いま一度、復興のあるべき姿を問い直す必要があるだろう。

この大きな減災や創造的復興は、「世直し」というべきものである。立て直しはほぼ完了したが、この世直しは終わっていない。20年を経過した今、次の備えとしての予防につなげる復興、未来の社会づくりとしての新たな価値観を生む復興は、いまだ道半ばである。この意味で、私は復興は終わっていないと思っている。大災害からの復興はエンドレスかもしれない。

室崎 益輝氏

プロフィール

Profile

1944年生まれ
京都大学大学院工学研究科修士課程修了。工学博士
ひょうごボランティアプラザ所長
兵庫県立大学特任教授・神戸大学名誉教授
(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 副理事長兼研究調査本部長

2015年ネパール・ゴルカ地震 ～その時、バクタプルでは～

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター上級研究員

清野 純史



2015年4月25日12時56分、ネパールの首都カトマンズの西方約80km、深さ約15kmの地点を震源とする大地震が発生した。モーメントマグニチュード(Mw)は7.8、インドプレートがユーラシアプレートの下に沈み込むことによって生じるプレート間地震であり、断層のタイプとしては典型的な衝上断層(低角逆断層)である。ネパール全土で8,000人以上の尊い命が失われたといわれている。人命と同じく、かけがえのない歴史遺産も、その多くが大被害を受けた。カトマンズ谷にある7つの世界遺産地区の歴史的建造物も例外ではない。赤れんがの綺麗な町並みを残すバクタプルもその中の一つである。

その日、バクタプルのダルバール広場は、いつものように外国人観光客でごった返していた。12歳の少女クリシュナは、この広場に来てはいつも外国人に話し掛けて、英会話の勉強をしている。将来は欧米に留学して建築を学び、カトマンズ谷の世界遺産を地震から守る仕事に就くのが夢だ。英語で案内すればチップをもらえることもある。おばあちゃんと2人暮らしの生活にとっては、わずかなチップでさえ重要な収入源だ。

この日はどの観光客に話し掛けても構ってもらえず、仕方なく近くのトゥマディー広場にある、この辺りでは一番背の高いニャタポラ寺院に向かった。寺院の五重塔(パゴダ)が聳える5段の堅牢な基礎の階段の上で、広場を楽しむように漫遊する無数の観光客をぼんやりと眺めていた。

その時、クリシュナの体が小刻みに揺れ始めた。お腹が空きすぎて頭までくらくらしてきたのかしら、と思った瞬間、突如轟音と共に激しい横揺れが来た。広場にいた観光客は皆動くこともできず、ある者は恐怖でその場に蹲り、ある者は大声で叫びながら同行者に抱き付いている。クリシュナも階段脇の守護神の石像に必死にしがみ付いた。顔を上げて正面を見ると、広場を挟んだ4階建てれんが造りの瀟洒なホテルの壁に、右上から左下に向かって、斜め45度の大きなクラックが入った。と同時に、その部分がとてつもなく大きな音を立てて崩れ落ちていった。石像にしがみ付きながら左手を見ると、3層建てヒन्दゥー寺院であるバイブラナート寺院が今にも崩れそうに激しく左右に揺れ、2階と3階の屋根からはたくさんの瓦が落ちて来ている。右手を見ると木とれんがを組み合わせて造られた古い2階建てレストランの1階が傾き始め、2階で食事をしている観光客が木製の窓枠を掴みながら大声で助けを求めている。

激しい横揺れは間もなく収まったが、ゆっくりとした大きな揺れが依然として続いているので逃げることもできない。見上げると、30mの高さのパゴダが前後左右に大きく揺れていて、クリシュナの周りでは塔を支える幾本もの木製の柱がみしみしと唸りを上げている。階段脇の女神や象や獅子などの像も、がたがたとまるで生き物のように動いている。クリシュナはこのまま塔が倒れてしまうのではないかと思った。でも1934年のビハール大地震の時も、この塔だけは頑張って建っていたというおばあちゃんの言葉を思い出し、今度もどうか塔が倒れませんようにと、目を瞑ってヒन्दゥーの神様に一心にお祈りをした。

そのおかげか、たった数分なのに、何十分も揺れていたのではないと思われる地震が、やっと収まった。多くの人が大声で怒鳴り合ったり、泣き叫んだりする声が聞こえる。周りの至る所で、クリシュナが生まれるもっとも昔からある歴史的な建物が壊れ、そこかしこで土埃がもうもうと上がっている。大事な世界遺産なのに。クリシュナはふっと我に返り、ニャタポラ寺院の階段を転げるように駆け降りた。そして、バクタプルの外れにある、おばあちゃんと住む古いれんが造りのアパートへ向かって一目散に駆け出した。

(現地調査期間：2015年9月13日～18日、J-RAPIDによる支援を受けて)



1934年ビハール地震後のニャタポラ寺院



2015年ゴルカ地震後のニャタポラ寺院

清野 純史氏

プロフィール Profile

1957年生まれ

京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修士課程修了。博士(工学)

京都大学大学院地球環境学堂教授

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター上級研究員